

# 「文革」期における合唱組曲『長征組歌』とその政治的意義

## The Chorus Suites “Long March” during the Cultural Revolution and its Political Meaning

鐙屋 一  
Hajime ABUMIYA

*Keywords* : the Chorus Suites, Long March, Xiao Hua, Chinese Communist Party, Cultural Revolution

キーワード：合唱組曲、長征、蕭華、中国共産党、文革

### はじめに

『長征組歌』は、1930年代の中国共産党（以下中共と記す）の軍隊である中国労働紅軍（以下紅軍と記す）の長征をテーマにした合唱組曲である<sup>(1)</sup>。紅軍の長征は、中共党史の重要な一部であり、また毛沢東の権力掌握の「画期」を示すものであることから、中華人民共和国建国以前の「神話」的な物語として広く知られている。『長征組歌』は、当時中国人民解放軍総政治部主任で最年少の将軍である蕭華<sup>しょうか</sup>が詞を、多くの革命歌曲で定評のある北京軍区戦友文工団の4人の作曲家が曲を書き、江西脱出から湖南・貴州・四川を経て陝西北部へ到達するまでの「苦難奮闘」を「告別」「突破封鎖線」「進遵義」「入雲南」「飛越大渡河」「過雪山草地」「到吳起鎮」「祝捷」「報喜」「大会師」の10曲に分けて描いている。原詩は毛沢東の詩『七律・長征』の首聯「紅軍不怕遠征難、万水千山只等閑」（紅軍は遠征の困難を怖れない、多くの山も川もものとしな）に依拠し、長征組詩『紅軍不怕遠征難』と命名された経緯から、合唱曲の『長征組歌』は『紅軍不怕遠征難』と通称される<sup>(2)</sup>。

1965年8月1日の建軍節において北京で正式に上演された。その初演の模様を新華社記者は次のように伝えている。

幕が上がると紅軍の装束の百名余りの合唱と器楽の団員が現れる。しっかりした声で朗読。「長征は歴史の記録で最初のもの。長征は宣伝書であり、長征は宣伝隊であり、長征は種まき機である。長征は我々の勝利で終了する」。続いて、一曲一曲が演奏され、観客の面前に、長い長征の途上、蒋介石の数十万の反動軍の包囲掃討を粉碎し、険しい山、荒ぶる河を越えていく絵巻が繰り広げられ、「紅軍不怕遠征難、万水千山只等閑」という英雄の勇壮な気概が示される。陝北に到着し、会寧で三軍が合流し、銅鑼太鼓が鳴り、秧歌が踊られ、スクリーンに偉大な領袖毛主席の巨大な肖像が登場する。そのとき「領袖毛主席を讃えよう、偉大な共産党を

讃えよう」の歌声でクライマックスに達する<sup>(3)</sup>。

初演以来たいへんな人気を博し、北京ではその後連続して30回余りも公演が行なわれ、まもなく全国に強烈な反響をもたらし、国慶節前後に上海で19回、南京でも11回上演し、観衆は10万人余りにのぼったという<sup>(4)</sup>。

しかしその翌年に始まる「プロレタリア階級文化大革命」（以下「文革」）のもたらした極左主義による文芸政策によって多くの文芸作品が「追放」される中、紅軍長征と毛沢東を讃美する『長征組歌』も例外ではなかった<sup>(5)</sup>。

本稿の目的は、「文革」期における『長征組歌』批判と、10年後の1975年におけるその復活の経緯を明らかにし、その政治的意義を解明することにある。

## I. 「文革」初期における『長征組歌』と五一三事件

### （1）一一九事件の発生と蕭華批判

1965年11月の姚文元論文「新編歴史劇『海瑞の免官』を評す」発表以来、文学芸術の問題が政治問題化する様相を深め、革命主義を重視する極左思想が影響力を強めていた。権力闘争が激化し、1965年12月には、羅瑞卿国防相が失脚し、総政治部主任の蕭華にも圧力が加えられるようになった。

1966年2月、「文革」の奪権闘争の「前戦」が解放軍にもちこまれた。林彪国防相が江青に委託し招集したという名目の「部隊文芸工作座談会」において「文学芸術界では建国以来、毛沢東思想と対立する反党・反社会主義の黒い線がわれわれに独裁を行なってきた」、「この黒い線を徹底的にとりのぞかなければならない」と宣言された。解放軍の文化・文芸を管轄する総政治部の首長である蕭華は、軍と無関係の江青（國務院文化部電影局芸術顧問）の容喙を嫌い、逆に江青等中央文化革命小組（以下文革小組）との亀裂が発生していた<sup>(6)</sup>。

やがて「文革」派による奪権闘争の本格化に伴い、軍内の長老が批判の俎上に上げられる。賀龍、葉剣英、陳毅、徐向前等元帥級存在は軍内における「文革」推進の障害とみなされていた。「文革」派は、蕭華が司る総政治部が造反派を弾圧し「賀龍を保護」していると主張し、まずは劉志堅（総政治部副主任で全軍文化革命小組（以下全軍文革小組）組長）を批判し、次いでその「黒幕」として蕭華への攻撃を開始していた<sup>(7)</sup>。

1967年1月11日、中央軍事委員会（以下中央軍委）が全軍文革小組を改組し、組長を劉志堅から徐向前に替え、江青が顧問、総政治部主任の蕭華が副組長となる。当時、江青が林彪に対し蕭華を総政治部主任の職務から追放するように提案したが、林彪は、総政治部主任は毛沢東の許可がない限り変更できないとし、とりあわなかった<sup>(8)</sup>。

1967年1月19日午後、中央軍委が京西賓館で拡大会議を召集し、軍隊で「四大」（大鳴、大放、大弁論、大字報）をやるかどうかを討論し、葉剣英、徐向前、聶榮臻等と江青、陳伯達、康生等中央文革小組とが激しく衝突した。江青、陳伯達は、中央文革小組の意見が通らないの

は蕭華に責任がある、「蕭華は劉志堅の黒幕だ」と罵倒し、当夜工人体育館で蕭華批判の十万人大会を召集すると宣言する。これに驚愕した周恩来が、蕭華を批判してはならないという毛沢東の言質を取り、大会を中止させる。体育館に集合した北京軍区戦友文工団、総政文工団、解放軍芸術学院の造反派が蕭華宅を襲撃し、蕭華はかろうじて西山の葉劍英宅に逃れた。軍幹部と文革派とが衝突した一一九事件である<sup>(9)</sup>。

翌1月20日午前、中央軍委の会議の参加者は「蕭華事件」で中央文革小組を厳しく非難した。葉劍英、徐向前がテーブルを打ちながら激しく怒りを示し、林彪は、中央文革小組に大いに憤り、江青を呼びつけて罵倒し、蕭華を保護するために自らの辞職も示唆するほど感情を露わにしたという<sup>(10)</sup>。

この間蕭華保護に動いていた周恩来も憤慨した。周は、1月27日に『長征組歌』で馴染みの北京軍区戦友文工団の造反派を接見し、「蕭華同志は紅小鬼（紅軍少年兵）から総政治部主任まで何十年も毛主席に従ってきた。彼がどうして毛主席に反対し、毛沢東思想に反対するのだろうか。（『長征組歌』の）『毛主席用兵真如神』（毛主席の用兵は神業だ）この句は真実を伝える表現ではないか。私は『長征組歌』を歌える。君たちはなぜ歌わないのか」、「『長征組歌』を君たちは書くことができるか。毛主席に対する愛着がなくて書くことができるか」と言い、『長征組歌』をもって蕭華を保護した<sup>(11)</sup>。

「蕭華事件」を契機に、軍の「老師」たちが「文革」派に反対を表明したことの意義は大きく、後に「二月逆流」事件と呼ばれ、葉劍英ら非林彪系の軍事指導者たちはこれによって批判され発言が封じられることになる。

一連の事件の背景には、解放軍内への干渉を強化したい江青「文革」派と、その干渉を防止し、軍内の安定団結を保持したい軍指導者との確執があるが、「文革」派への攻撃はその背後にいる毛沢東に対する「攻撃」となることを意味するために、実際の「攻防」は不透明で複雑な政治空間の中で行われており、それゆえ問題の分析評価は簡単ではない。特に後の林彪事件を契機に、「文革」中の「罪惡」の多くを林彪、「四人組」に附会したために、これに関わる歴史記述はいまだに混乱していると言わざるをえない。

## （2）『長征組歌』と五一三事件

「文革」中、北京の軍の文芸団体は2派に分裂した。一派は総參謀部、総政治部、総後勤部、空軍、海軍等の軍の指導機関を支持し、軍の安定保持を図る「老三軍」であり、別の一派は、中央文革小組が支持する軍内の造反派で「新三軍」といい、彼らは軍の各機関を攻撃し、党幹部を批判闘争し、組織の混乱を狙っていた<sup>(12)</sup>。

当時、空軍政治部文工団の劉素媛、邵錦輝等5人は日頃中南海に出入し毛沢東と会う機会があり、毛に対し団の活動ができないことを訴えていた。空軍の呉法憲を支持する「老三軍」は少数派で、造反派の妨害を受けていたためである。毛沢東は『在延安文芸座談会上の講話』（以下『文芸講話』）発表25周年の時に「老三軍」に公演させるように林彪に指示した<sup>(13)</sup>。

同時期の4月28日、周恩来が、北京軍区戦友文工団の造反2派の代表を接見し、「両派は連合しなければならない。連合して『長征組歌』を演るのなら見に行こう。連合しないのなら見に行かない」と指示していた。5月2日に周恩来は両派による『長征組歌』の上演を見に行った<sup>(14)</sup>。戦友文工団の2派は合同の演奏が可能であったようである。

この戦友文工団2派連合の上演と同時期に軍の文工団が上演した『長征組歌』に関する『人民日報』の記事があり、その様相がうかがえる。

記事では、1967年のメーデー記念の期間に首都では多くの文芸プログラムが上演される、京劇『沙家浜』『紅灯記』『奇襲白虎団』、芭蕾舞戯『白毛女』、交響音楽『沙家浜』など江青の革命样板戯や、『祝毛主席伴信万寿無疆』『北京有個金太陽』等の歌舞、『億萬人民揮起刀槍批臭<修養>』等の革命歌曲、反修正主義を描いた『反修凱歌』など文革中に誕生した革命歌舞の演目が上演されるとし、さらに「この期間中に革命群衆は、中国人民解放軍舞台文芸工作者が上演する『長征組歌』を見ることになる、これは紅軍二萬五千里の長征の偉大な革命史詩を題材とする大型組歌で、偉大な領袖毛主席の英明な指導と長征勝利を称え、毛沢東思想で武装した紅軍指戦員の、強敵を恐れず、困難を恐れず、克苦奮闘する偉大な英雄的気概を称えている」と紹介している<sup>(15)</sup>。この段階ではきわめて肯定的な評価がくだされていることが判明する。これは『長征組歌』が「文革」初期に上演された最後の記録である。

5月13日、『文芸講話』発表25周年を記念するため、周恩来は、北京の陸海空三軍の文芸団体に連合して公演するように指示した<sup>(16)</sup>。

だが先の公演とは異なり、この演奏会では武闘が発生してしまった。13日19時30分、李作鵬等が海軍直屬機関「紅聯総」を首とする「首都三軍無産階級革命派」（老三軍）を手配し、北京展覽館劇場での『文芸講話』発表25周年文芸公演を決定すると、上演の最中、解放軍芸術学院「星火燎原」を首とする「首都三軍革命造反派」（新三軍）と首都紅代会清華「井崗山」、北京工業大学「東方紅」等が会場を攻撃し武闘が発生、双方で50人余りの負傷者が出た<sup>(17)</sup>。

『周恩来年譜』は林彪側が故意に仕組んだとして「李作鵬らは連合して公演するようにという周恩来の指示に背き、計画的に一派の上演を支持して、別の一派を抑圧し、そのために『五一三』両派武闘流血事件を醸成した」と述べ、周恩来は武闘に参加した両派を慰問したが、「林彪、江青等」は、李作鵬、呉法憲、邱会作が支持するこの「老三軍」派を支持し、それによりこの派はいわゆる「林副主席が支持する三軍無産階級革命派」となったとする<sup>(18)</sup>。「林彪、江青等」の表現は、文革終了後の評価にもとづくもので、江青「文革」派が「新三軍」派支持であることは明白である。

5月15日、林彪が「老三軍」支持を表明し、医院に行き「老三軍」の負傷者を見舞い、毛主席語録と毛主席バッジを贈る。5月23日、「老三軍」が天安門広場でも公演を行い、林彪は北京衛戍区の兵士を派遣してこれを保護する。これにより「新三軍」は介入できなくなった。6月9日、「老三軍」は駐京陸海空軍革命文芸戦士の名義で、再度、人民大会堂で公演する<sup>(19)</sup>。呉法憲の回想によれば、この事件により軍内の「文革」派は崩れ、「老三軍」が返り咲き、林彪

と軍委が政治力を握り、北京の情勢が安定したという<sup>(20)</sup>。

この間、蕭華は武闘の現場に駆けつけ制止をはかるが、「老三軍」派からは五一三事件の「黒幕」であると大字報で批判された<sup>(21)</sup>。これは蕭華は「文革」派であることを意味している。

7月25日、林彪は天安門城楼で造反派群衆を謁見した際に、「戦闘せよ、突撃せよ、徹底的に総政の閻王殿を破壊せよ」と演説する。8月11日、林彪派は総政治部の建物に「総政は劉鄧ブルジョア階級司令部が軍内に設けた黒い支店である」、「蕭華は総政の党内最大の走資派である」という標語を張り出す。蕭華は彭德懷、黄克誠、譚政、羅瑞卿ら先に失脚した軍の指導者と並び、劉少奇、鄧小平の「黒分店」だとされる。12月20日に発表された『關於反革命修正主義分子蕭華的罪行和处理意見的報告』は、蕭華の反革命修正主義の「6つの罪状」によって北京衛戍区で「隔離反省」としている。1968年初、京西賓館に軟禁されていた蕭華が「失踪」する。後に北京中心部の松樹胡同の家に監禁されていたことが判明するが、監禁は7年間に及んだ<sup>(22)</sup>。その間、蕭華は「閻魔王」であり、『長征組歌』は「大毒草」とであると批判され、各文芸団体も派閥抗争に巻き込まれ、これ以降『長征組歌』が上演されることはなかった。

一一九事件では周恩来が、葉劍英ら軍の長老たちが、そして林彪が蕭華を「文革」派の攻撃から防衛したが、五一三事件では『長征組歌』も蕭華保護の役を果たせなかった。「二月逆流」鎮圧の結果、軍の長老たちの発言力が弱まり、劉少奇批判をめぐり周恩来も「文革」派に接近していたことが背景にあるが、本事件のように林彪評価がからむ事例では歴史的評価が難しくなる。例えば、「林彪、江青反革命集団」は党と軍を混乱させようと陰謀し「総政閻魔殿」の大冤罪をでっち上げ、総政主任の蕭華が攻撃され悪どい誣告と残酷な迫害に遭い、不法に7年半の間拘禁された<sup>(23)</sup>。五一三事件では林彪が両派の武闘を画策し、その咎を蕭華に負わせ放擲した<sup>(24)</sup>。林彪等が「総政閻魔殿」を破壊しようとし、軍内の造反派が、「林彪、江青」の指示を受け、蕭華打倒のために材料を探し回わり、『長征組歌』を「毛主席に反対し、毛沢東思想に反対し、蕭華個人を称揚するものだ」、「『長征組歌』は老いぼれたちを誉め讃えるもの、王明の誤った路線を呼び醒ます大毒草だ」と罪名をでっちあげた、というのが蕭華の伝記作家のおおよその評価である<sup>(25)</sup>。

興味深いのは、近年進展してきた林彪研究の側からの評価である。林彪はあくまで蕭華を保護しようとしたが、後の林彪集団の中核となる李作鵬、呉法憲、邱会作との連携を優先した、というのが温相『晩年林彪』での評価であり、単純な林彪悪玉論ではない<sup>(26)</sup>。

また例えば、丁凱文、司馬清揚は、蕭華は文革初期に極左に傾き、蕭華が組長となる総政下属の全軍文革小組も左傾しており、造反派の攻撃を支持していたが、呉法憲および邱会作の回憶では、林彪は五一三事件以後も蕭華を保護しようとしていたのであり、総政治部を「閻魔殿」だとする「攻撃」は、総政治部内に侵入した極左江青派を非難したものであり、林彪の蕭華批判も、毛沢東が鄧小平を「保護」するために「攻撃」したように、複雑な背景があり、五一三事件は典型的な林彪の軍隊安定保持の思想を表わしていると評価し、林彪の果たした本当



の作用は「文革」の否定であったことを示唆している<sup>(27)</sup>。

文化大革命の負の原因を林彪・江青集団に置く中国現代史に関しては、特に林彪事件の見直しが必要であり、この時期の歴史評価も今後の研究の進展を待ちたいと考える。

## Ⅱ．『長征組歌』の再演と「右からの巻き返し」

### (1) 蕭華「復活」と『長征組歌』の再演

1971年9月の林彪事件以後、「文革」は「階級闘争」から「安定団結」へと方向転換をしつつあった。1972年元日の『人民日報』社論は「団結して、より大きな勝利を勝ち取ろう」と題し、「前を懲らしめ後ろを正し、病を治して人を救う」をスローガンとして、「過ちを犯した共産党員には教育を主とする」ことを訴えた<sup>(28)</sup>。かつて「打倒」され「失脚」していった党政軍を指導する幹部の「復活」が、まずは徐々に、やがて閥を切ったように実施されていた。とくに「文革」史の画期として重要なのは、1973年春の鄧小平の「復活」であった。1974年の第10回党大会における「四人組」との角逐を経て、1975年1月の第10期2中全会では党副主席、副首相、軍事委員会副主席、軍総参謀長を兼任した。

蕭華の「復活」が決まったのは1974年9月の国慶節前夜であった。毛沢東は中華人民共和国成立25周年を記念する国慶節の観礼人員の名簿を審査して、9月29日、自ら「蕭華、劉志堅」の2名を追加した。蕭華を監禁していた江青は急いで蕭華を釈放させた。蕭華の釈放も7年前の拉致監禁と同じく突然であった。それも毛沢東の「決定」によるものであった<sup>(29)</sup>。

1975年は「全面的整頓」の年であるとされる。復活した鄧小平は党政軍の日常工作のみならず、「文革」による文化破壊に関しても「全面的整頓」を、すなわち批判された文芸作品の再評価を始めていた。「四人組」の極左主義による文化的「専政」状態の中、観衆を楽しませる演目があまりに限られていたことから、「整頓」は大いに歓迎されていた。

鄧小平の「整頓」の拠点になったのは、1975年6月に発足した國務院政治研究室である。構成員には胡喬木（毛沢東秘書）、呉冷西（新華社社長、『人民日報』総編集、中央宣伝部副部長）、胡繩（中共中央政治研究室副主任、『紅旗』副総編集）、熊復（中央宣伝部常務副部長兼新華社社長）、鄧力群（『紅旗』副総編集）、于光遠（国家科学委員会副主任）、李鑫（中央弁公庁副主任）である。ほとんどが「文革」中に迫害され、再教育施設である五七幹部学校から復帰しており、思想工作、理論工作において「四人組」と対抗する中核組織となった<sup>(30)</sup>。同時期に上演上映される舞台作品や映画が少なすぎることを不満とし「百花齊放がない」と憤慨し、「四人組」が禁止した映画『創業』に「問題はない」と毛沢東自身が判断したことが文芸面での「整頓」を大いに加速することになった<sup>(31)</sup>。

「復活」したとはいえ蕭華の職務の「分配」は遅々として進まず、1975年7月になってようやく軍事科学院第二政治委員に任命された。蕭華と院長の宋時輪（元総政文化部長）は軍事科学院の日常工作を掌握すると同時に、目前に迫っている紅軍の長征勝利40周年を記念する機

会を利用し「光栄ある革命の伝統」を宣揚しようとした。蕭華は、講演、執筆を通して長征を宣伝し、党と軍の「優良な伝統」を説いた<sup>(32)</sup>。

1975年の「文芸調整」の進展により『長征組歌』も文化的統制から「解放」され、鄧小平は総政治部文化部が管轄する合唱組曲『長征組歌』の再演を指示した<sup>(33)</sup>。

蕭華は作詞者として『長征組歌』再演に向けて修正の作業を行った。例えば、第1曲「告别」では、「王明路線滔天罪、五次圍剿敵猖狂」（王明路線は滔天の罪だ。五回目の包圍掃討で敵が猛り狂う）の詞を追加した（『紅軍不怕遠征難—長征組歌』歌詞対照表）を参照<sup>(34)</sup>。

「文革」中のある大字報は「『長征組歌』是為老家伙們歌功頌德、為王明錯誤路線招魂的大毒草」（『長征組歌』は老いばれたちを誉め讃えるためのもの、王明の誤った路線を呼び醒ます大毒草だ）と『長征組歌』を批判していた<sup>(35)</sup>。1975年の歌詞の書き換えはこのような批判をかわす意味を含んでいる。

また例えば、第2曲「突破封鎖線」では、「圍追堵截奈我何、数十万敵空惆悵」（包圍殲滅でも我をどうもできない。数十万の敵が空しく失望する）の句を「全軍想念毛主席、迷霧途中盼太陽」（全軍が毛主席を思い、迷霧の中で太陽を待ち望んでいる）と改めた（「歌詞対照表」を参照）。北京軍区戦友文工団の歌手で初演以来『長征組歌』のバス独唱を担当してきた馬子躍は、30年後にこのように解説している。

鄧小平自身が「全軍想念毛主席、迷霧途中盼太陽」の句について「当時、敵は惆悵（失望）していたが、われわれ自身も惆悵（失望）していたではないか」と言っている、この修正版では新しい思想が与えられ、それは盼（待ち望む）の字に表現されている、「この曲は歴史を題材とする創作歌曲である」と作曲家たちが言っているように彼らの長い間の軍隊生活が厚い土台となっている、歌詞の内容を正しく理解しよう、紅軍は毛主席が手ずから作った労働者と農民の部隊であり、光栄ある伝統を有する英雄の部隊である、目標も支援もなく、前も後ろも敵軍であるという状況で勇敢に前進した紅軍長征の状況を表現している、「全軍想念毛主席、迷霧途中盼太陽」は紅軍の内心の希望と信念を表現した全曲のクライマックスである、と<sup>(36)</sup>。

また再演にあたり、オーケストレーションを変更する任務が、作曲家の李遇秋に与えられた。その結果、1975年10月の紅軍長征勝利40周年を記念する公演では、この合唱組曲は、さらに悲惨さを基調とし、深く沈んだムードで、首都の舞台に登場することになり、2000人余りが坐る、北京展覽館の劇場で、2ヵ月間で連続40回上演した。どの回も満席となる人気ぶりであった、と李遇秋は回想している<sup>(37)</sup>。

公演の状況について『人民日報』は次のように伝えている。

新華社1975年10月19日通信。中国工農紅軍長征勝利40周年を記念するため、人民解放軍各総部、軍区、軍兵種文芸単位は、今日から首都の4つの劇場で同時に工農兵のために偉大な長征を称える文芸プログラムを上演する。

これらの文芸プログラムは、話劇『万水千山』、長征組歌『紅軍不怕遠征難』、舞踏『飛

奪廬定橋』、『風卷紅旗過雪山』、『艱苦歲月』、及び独唱、独奏、重唱、軍楽合奏等を含む。それぞれ異なる角度から中国工農紅軍長征二万五千里の英雄的業績を反映し、長征の偉大な意義を宣伝し、毛主席のプロレタリア階級革命路線を称えている。

長征組歌『紅軍不怕遠征難』は、話劇『万水千山』と同様に、党内の2つの路線闘争と各路紅軍の団結闘争を突出させている。『紅軍不怕遠征難』は激情に溢れ、希薄に満ちている大型組歌で、10年前に首都で上演されたとき広範な工農兵観衆の熱烈歓迎を受けた。最近、歌詞作者の蕭華同志が加工と修正を行い、北京舞台政治部歌舞団文芸工作者が懸命にリハーサルを行い、組歌を一層豊富な教育内容と芸術的な感染力を持つようにした。組歌は『告别』、『突破封鎖線』、『遵義會議放光輝』、『四渡赤水出奇兵』、『飛越大渡河』、『過雪山草地』、『到吳起鎮』、『祝捷』、『報喜』、『大会師』の10部分からなる。それは革命の激情に満ちた朗読と民族の風格に富んだ音楽形象をもって、中国工農紅軍が、王明一味が毛主席を排斥するという、党と紅軍の指導にとって困難な条件下で、戦略的転移を迫られて実行した長征の途上の、「全軍想念毛主席、迷霧途中盼太陽」という情景を表現しており、また、遵義會議以後、紅軍が毛主席の英明な指導の下、蒋介石の数十万の反動軍隊の包圍掃討を勇敢に粉碎し、多くの困難を征服し、勝利で前進する英雄的な豪壮な気概を情熱的に称えており、また、各路の紅軍が陝北で勝利して合流し、辺区人民の熱烈な歓迎を受ける感動的な情景を表現している。この音楽プログラムはいきいきとした形象で、長征の勝利は、毛主席の革命路線が、王明、張国濤の「左」と右傾機會主義路線に打ち勝った勝利であることを表明している。また、革命の道路がいかに曲がりくねっていても、毛主席の革命路線をきっぱりと執行すれば、往くところ勝利しないことはなく、向かうところ敵はいないことを表明している。

紅軍長征勝利40周年を記念する日日において、全軍の各部隊文芸工作者は多くの紅軍長征を反映したプログラムを創作しリハーサルをし、部隊、工場、農村に深く入り上演し、紅軍の光榮ある革命伝統を広く宣伝し、毛主席の革命路線の継続革命の長征の途に沿って勇敢に前進するよう軍民を鼓舞している<sup>(38)</sup>。

『長征組歌』を含む長征勝利40週年記念の各演目は、10月19日からまず北京の4つの劇場で同時に上演され、その後、工場、農村、部隊へと巡回していった。11月4日までに64箇所上演され、観衆はのべ13万人にのぼる、と報道されている<sup>(39)</sup>。

公演はたいへんな好評で11月下旬になっても継続上演されている。11月22～25日毎晩7時15分に北京展覽館劇場で『長征組歌』を上演する案内が新聞紙上に繰り返し掲載されている<sup>(40)</sup>。

## (2) 周恩来の死と『長征組歌』の映画化

合唱組曲『長征組歌』は、同じく長征を題材とする話劇『万水千山』と長征を含む共産党史を描く大型音楽歌舞『東方紅』と同様に、その完成にいたるまで周恩来自らが深く関わってい



た。その意味では『長征組歌』は周恩来の「作品」でもあった。「四人組」の周恩来批判の延長上にも『長征組歌』が存在していた。

『周恩来年譜』によれば、1975年10月、鄧小平の支持を得て『長征組歌』の再演に成功すると、鄧穎超（周恩来夫人）から電話があり、「総理が病院で人生最後の『長征組歌』を見たいと言っている」と。その後関係部門にも総理弁公室から電話があり、周恩来が『長征組歌』の録音を聞きたがっていると伝達してきたという<sup>(41)</sup>。

ある伝記作者は、周恩来は生前、17回上演を見ており、完璧に歌うことができたという。病床の周恩来が『長征組歌』を聞きたがり、鄧穎超が録音テープを探してきて聞かせた。臨終の床にあって周恩来は『インターナショナル』の「インターナショナルはかならず実現する」の部分と、『長征組歌』の第6曲「過雪山草地」の「官兵一致同甘苦、革命理想高於天」（官も兵も甘苦を共にする。革命の理想は天よりも高い）を口ずさみながら眼を閉じた<sup>(42)</sup>、と記している。

李遇秋（作曲者）の回想では、ある上演の直前に中央電視台の同志が劇場に来て「総理が病院で『長征組歌』を見たがっているので、今日は現場を撮影にきました」ということがあった<sup>(43)</sup>。

唐江（指揮者）の回想では、1975年末のある日、『長征組歌』の上演を終え化粧落としも済んでいないときに突然電話があり、周恩来が『長征組歌』を見たがっているが病状が重く劇場には行けないので、再度上演してもらい、それを録画して周恩来に見てもらおう、ということであった。唐江たち100人余の団員全員が、北京展覽館の無人の客席に向かい、周恩来を想い涙をこらえながら全10曲を合唱したという<sup>(44)</sup>。

1975年冬は「四人組」が「批鄧、反撃右傾翻案風」（鄧小平を批判し、右からの巻き返しの風に反撃する）運動をおこし、周恩来、鄧小平を激しく攻撃していた。「翻案」とは名誉回復を指している。運動の背後には鄧小平の「整頓」が「文革」を否定するものであることを嗅ぎとった毛沢東の判断があった。

1975年に中央軍事委に復帰した鄧小平は、早くから解放軍八一電影制片廠に『長征組歌』の映画化を指示していた<sup>(45)</sup>。映画化は多くの政治的要因から完成までの道行は複雑であった。初演以来『長征組歌』を指揮した唐江はその経緯を回想し次のように述べている。

1975年末、戦友文工団は八一電影制片廠と協力し『長征組歌』を映画にするよう指示を受けた。ちょうど時を同じくして鄧小平が批判の対象となり、「批鄧、反撃右傾翻案風」運動が全国的に展開され、さらに1976年1月8日に周恩来が逝去し、映画化の任務も追悼のため一週間停止した。追悼用の黒いベールや白い花は禁止されていたが、内部で密かにそれらを用いて演劇関係者全体で追悼会を行ったことから映画化に対する圧力がさらに強くなった。撮影に必要な劇場はどこも使用が許されず、唐江は中央党校の友人に依頼して講堂を使うことにした。講堂は10年間使われておらず暖房が使用できなくなっていた。撮影機器には温度が必要であった。前総政文化部長で八一廠廠長の劉嘉が自分は撮影禁止の指示など知らないということで、10トンの石炭を都合し5台のトラックで中央党校に運び入れ、ようやく撮影が可能に

なった、ということである<sup>(46)</sup>。

映画『長征組歌』の完成には、敢えて批判を甘受しようと決意した監督の王苹の力が作用していた<sup>(47)</sup>。王苹を追悼する『人民日報』のある記事は、「新中国最初の女性映画監督王苹同志」は階級は少佐と高くはないが、彼女の代表作品である音楽舞踏史詩『東方紅』、そして『長征組歌』は永遠に人々の心に残る。「特に忘れられないのは、1975年冬から1976年春、極端に残酷な政治情勢の中で、王苹は危険を怖れず、数々の困難を克服して、長征組歌《紅軍不怕遠征難》を監督し、革命の正気を発揚し、全党、全軍、全国人民の革命の闘志を鼓舞した<sup>(48)</sup>」とその業績を称えている。

映画の公開直後には、「北京部隊政治部歌舞団の上演を撮影したカラー舞台芸術映画『紅軍不怕遠征難－長征組歌』は銀幕上に紅軍長征の気宇壮大な山河の歷程、毛主席の革命路線の偉大な勝利を情熱的に賞賛している。映画の上映は観衆に生き生きした革命伝統教育を与えている」と報道された<sup>(49)</sup>。

今日われわれが『長征組歌』の具体的な姿を、譜面ではなく、影像と音声によって知ることができるのは、王苹監督の成果であるといわねばならない。舞台上では長征当時の紅軍の軍旗の下で合唱団と楽団員の全員が紅軍の軍服・軍帽を着用し、あたかも当時の兵士たちが歌っているかと錯覚させる。作品の内容は毛沢東讃歌であるが、時代の政治的背景を踏まえれば、それは「翻案風」、すなわち名誉回復勢力の強烈な意思表示であった。

### Ⅲ. 『長征組歌』をめぐる「歴史」と「政治」

#### (1) なぜ「四人組」は『長征組歌』を攻撃したのか

修正版『長征組歌』が長征勝利40周年記念として再演された際の「四人組」の「反応」について、『人民日報』は新華社の記事を転載している。記事は概要次のように述べる。

群衆の熱狂的な支持にも関わらず「四人組」で『長征組歌』の公演を誰も見に行ったものはいなかった。「正しい路線の代表」「文芸革命の旗手」を自負する彼らの臨席を欠けば『長征組歌』の威信も地に落ちるという考えからであるが、逆に大衆の熱烈な歓迎と賞賛が「四人組」を痛打することになった。大衆の賞賛に怒った張春橋は、『長征組歌』や他の長征を記念する演目に対する「異なる意見」を集めるように命令し、将来の「清算」の準備を始めていた。姚文元も管轄下の言論機関に対し『長征組歌』関連の文章を掲載しないよう指示した。同時に「四人組」配下は『長征組歌』に対し「包圍掃討戦」を展開した。『長征組歌』は「毒草」だと侮辱し、その上演は「復旧」「翻案」（名誉回復）で、老元帥たちのための「招魂」（死者の霊を呼び戻す）だとし、上演後は「批判」し「消毒」と威嚇した。録音の放送、レコードの制作、歌集の出版は一律に禁止された。撮影中の映画の制作も禁止令によりあやうく頓挫するところだった。上海のある楽団の『長征組歌』上演は彼らに「扼殺」され、南京部隊歌舞団の上演も禁止された。「四人組」の「特務」たちは『長征組歌』を見に来た老幹部を暗に監視し

逐一記録していたという<sup>(50)</sup>。

この記事は「四人組」に対する批判キャンペーンを張っていた1977年当時のものであるが、『長征組歌』の政治的意義を測る上で重要である。この記事からは、『長征組歌』等「長征」関連の文芸作品が、紅軍の「光栄ある伝統」を強調し称揚することが、「四人組」の権威を大いに殺いでゆくことに頑強に抵抗している様子がうかがえる。

『長征組歌』と同じく長征を題材にした話劇『万水千山』も1975年に再演が可能となったが、やはり『長征組歌』と同じく「四人組」がそれを敵視し公演を禁止した理由について、次にみる『人民日報』の鄭翼の記事が鋭く指摘している。

まず、「四人組」が、文革期において、長征、抗日戦、内戦と長期の戦闘を経てきた多くの「老同志」を打倒するためには、党と軍の歴史、すなわち「光栄ある伝統」を描く作品を否定しなければならなかった、と鄭は言う。

「我軍の各級の指導的立場には、毛沢東に随い『南征北戦』し、長期の革命の試練を経た指導的幹部が多くおり、彼らは毛主席の革命路線を忠実に実行する我軍の指導者であり、紅軍長征の革命精神と光栄ある伝統を継承し発揚する模範であり、我軍がプロレタリア階級専政の強力な支柱である重要な保証であり、それは「四人組」が党権を篡奪するさいの大きな障害であった<sup>(51)</sup>」

次に、王明路線や張国濤路線など誤った路線を批判する作品は、「四人組」批判に繋がることから抹殺する必要があったことを指摘し、さらに、紅軍兵士の経歴は「四人組」の「醜い汚れた」経歴と鮮明な対照をなしており、紅軍の長征での「雪山草地での刻苦奮闘」を描くことは、江青、張春橋が1930年代の旧上海で「蒋介石の誕生日を祝っていた」ことを想起させることから、長征を描く作品は否定しなければならなかったと説く<sup>(52)</sup>。

総じて、「四人組」は、故意に紅軍長征40周年を記念する宣伝活動に難癖をつけ、紅軍長征を回憶する文章や老紅軍の詩詞の発表を許さなかったのは、「要するに、我党我軍の革命の歴史と光栄ある伝統を一刀で断ち切り、彼らが党権を篡奪する意図に照らして歴史を改竄し、革命伝統を歪曲しようとしたのである」と結論する<sup>(53)</sup>。

## (2)『長征組歌』が果たした役割とは何か

それでは、翻って『長征組歌』の政治的意義について考察してみたい。

1975年の長征勝利40周年を記念する『長征組歌』などの文芸プログラムを見た観衆たちの反応を見てみると、「紅軍長征の光栄ある伝統」が観衆の感動の焦点となっていることがわかる。彼らは「これらの文芸プログラムが、生き生きとした形象で長征の戦闘の歷程と紅軍の英雄的な業績を再現し、毛主席の革命路線を情熱的に賞賛している」ことから教訓を得て、過去の党と軍の歴史と、自分の個人的な境遇を重ね、「長征」をモデルに、長征を生き抜いた老紅軍たちの「刻苦奮闘」をモデルにする意志を表明している<sup>(54)</sup>。

ある記事はこのように伝えている。

「連日、祖国各地の広範な工農兵は、これらの文芸プログラムの上演を、ラジオで聴いたりテレビで見たりして、首都の広範な観衆と同じく、興奮し鼓舞されている。上海の青年労働者、広東の知識青年、雲南の辺境防衛の戦士、草原の紅衛兵、かれらが次々に手紙を書いて、偉大な長征を称えるこれらの文芸プログラムを賞賛している。彼らは長征を歌い、紅軍に学び、先輩たちが切り開いた革命の道に沿ってプロレタリア階級専政を強固にする闘争を最後まで突き進めると決心した<sup>(55)</sup>」と。

記事は「文革」の最中に発表されており、「四人組」による反経験主義キャンペーンによる「歴史」の否定が始まろうとしている。周恩来の死も鄧小平の再失脚もその後のことである。だが、いまだ「文革」の枠組みの中にある観衆の意識からは、「文革」派が宣伝している「伝統」破壊や「歴史」の否定とは全く異なる景色が透けて見える。

李遇秋の回想では、『長征組歌』の再演を見に来た観衆の多くは、「牛棚」（収容施設）から出たばかりや「掛起来」（公職追放）されていた老紅軍、老八路軍であって、みなが上演を見て涙を流したという<sup>(56)</sup>。

「四人組」逮捕直後、1976年11月12日と『長征組歌』が頻繁に上演されている。当時の『長征組歌』の観衆について、ある報告記事は次のように述べる。

「観衆の中の、毛主席に着いて南北を転戦した老紅軍戦士たちは、組歌の旋律とリズムに合わせて、彼らのよく知っている、彼らを感動させる歌を口ずさんでいた。彼らのしっかりした眼差しは、あたかもあなたに告げているようだ。万里の長征ははまだ終わっていない。継続革命の大道を、われわれは英明な領袖華主席に従って前進しろと<sup>(57)</sup>」

修正版の『長征組歌』の山場では「全軍想念毛主席、迷霧途中盼太陽」と反復して合唱される。歴史の描写としては、次曲で描かれる遵義会議での毛沢東の登場を「太陽」に例えているのだが、「文革」当時の政治的気候の中では、この歌詞は「婉曲で含意の深い歌詞だ、歴史に合致するし、希望がもてる」と鄧小平自らが述べたと指揮者の唐江が回想している<sup>(58)</sup>。

唐江の意図を敷衍しよう。第2曲「突破封鎖線」の最後の句「迷霧の中で太陽を待ち望んでいる」が「歴史」に合致するというのは、次の第3曲「遵義会議放光輝」への導入であり、誤った路線に道を迷わされた紅軍が遵義会議での毛沢東の指導によって正しい路線と目標を与えられたことを指している。さらには、同時代の「四人組」の誤った路線「文革」がもたらした「迷霧」（混乱状態）から脱出する「希望」の光が差してくることを暗示している。この詞は、当時の情況に照らせば、毛沢東を利用した「文革」批判であると読むことができる。事実、状況は「迷霧」の中にあり、鄧小平と周恩来は、1975年末には経験主義批判、『水滸伝』批判などで攻撃され続け、周恩来追悼に関わる天安門事件直後の1976年4月7日の政治局会議は鄧小平を全ての公職から追放した。

「文革」後期において、初期に迫害された党政軍の幹部たちが「復活」してくる。「文革」を否定することは、アイディアとしてさえ生まれていない時期であるが、彼らにとっては、現状を批判し、自らの立脚点を確認してくれるのが『長征組歌』をはじめとする「長征」作品であ

った。過去の紅軍の「光栄ある伝統」が、毛沢東崇拜を梃子にして、彼らに精神的な一体感を与え、凝集力を与えていると考える。その精神的な基盤は、一旦バールを剥いでみれば、後に「文革」を否定する「抜乱反正」（混乱收拾と秩序回復）の出発点を、ひいては1980年代の「保守派」、左派正統主義の水源を発見できるのではないかと考える。

## むすびにかえて

### （1）もうひとつの『長征組歌』：総政版『長征組歌（表演唱）』

戦友文工団の上演した『長征組歌』は国内外で称賛されたが、多くの人は当時、北京軍区戦友文工団の『長征組歌』のほかに、蕭華が特に中国人民解放軍総政治部歌舞団（以下、総政歌舞団と記す）に大歌舞『長征組歌』の上演を依頼していたことを知らないであろう、として孫煥英は前者「戦友版」と後者「総政版」の作成について紹介している<sup>(59)</sup>。

北京軍区戦友歌舞団団長で「戦友版」の作曲者のひとりである晨耕の回想では、1964年11月、蕭華は、晨耕と総政歌舞団団長で作曲家の時楽濤を召集し、彼等二人に『長征組歌』を舞台でやれるように依頼した。そして蕭華は「私はあなたがたに『長征組詩』の歌曲を合作してほしい。総政歌舞団には舞踏を伴った大合唱を、戦友文工団には普及させやすい音楽晩会をやってもらいたい。12首を全部曲にしなくてもよい。『三大規律八項注意』のような歌曲にして、12首の詞の意味を溶け込ませてもよい。もちろん作曲の必要からその中の部分的な歌詞を変更してもよい」と言う<sup>(60)</sup>。

蕭華は、「戦友版」は「通俗的で普及型の合唱曲で老幹部たちでも歌えるもの」、「総政版」は大型歌舞『東方紅』のような歌と舞踏と寸劇が組み合わさった「専門型」のもののふたつの版を構想していた<sup>(61)</sup>。

総政歌舞団は、命令を承けてから、すぐに創作班を組織した。蕭華はこの版も重視していた。彼は青島で療養していたとき、総政歌舞団の創作班を青島に呼んで『長征組歌』の作曲の問題を一緒に研究していた。1966年2月、総政歌舞団の『長征組歌』が京西賓館礼堂で2回上演された。そのとき蕭華と周恩来と一緒に観劇した。周恩来は蕭華にどっちがいいか聞いた。蕭華はどちらもよい、と言う。総政歌舞団のプログラムには、合唱もあり、歌舞もあり表演もある。音楽の交響曲性も強く、壮観で、氣勢がある、北京で開催した全軍高級幹部会議で報告され上演され、好評であった、と。周恩来と蕭華ら指導者は八一制片廠に映画化するよう要請した。しかし「総政版」の映画制作は、その緒に就いたばかりで、「文革」となり不可能となった<sup>(62)</sup>。

### （2）「改革開放」時代の『長征組歌』

「総政版」は思わぬ形で歴史に登場する。1985年8月の蕭華の死から10年がたとうとする1995年に、「戦友版」の作曲者である李遇秋は、蕭華夫人の王新蘭と多くの指導者たちの依頼



により、総政歌舞団の著名な指揮者で「総政版」作曲者のひとりである胡德風と共同で、『長征組歌』の大幅な改編を行うことになった。『長征組歌』誕生30周年と長征勝利60周年記念を睨んでのことである。李遇秋らは修改稿として200頁あまりの総譜を仕上げた。新版『長征組歌』の審査にあたった中央軍委副主席の張震は、「老版はそもそも好いが、新版はもっと好い、錦に花を添えている」と賞賛したという<sup>(63)</sup>。

「新版」お披露目の記事が、その模様を詳しく伝えている。

「1995年10月10日午後3時、人民大会堂海南庁に中央軍委副主席張震、遲浩田が登場。老將軍張愛萍、肖克、呂正操、廖漢生、洪学智らも登場。総參謀長傅全有、総政治部副主任周子玉も参加。賀龍元帥夫人薛明、羅榮桓元帥夫人林月琴、羅瑞卿大將夫人郝治平も参加。白髪混じりだが元気である。半世紀余りの從軍の生涯の老戰友たちが相集い、殊のほか親密で握手したり挨拶したりする声は朗らかである。彼らは'95新版『長征組歌』音楽会に参加するために来た。

3時半、莫文驊將軍が音楽会の開始を宣布。王平將軍が講話。今年は中央紅軍長征勝利60周年であり、蕭華將軍の『長征組歌』発表30周年である、作曲者と何人かの音楽家たちが『長征組歌』の原曲の音楽部分を豊かにする加工を行い、成都華星光盤会社がレーザーディスクとカセットテープを作ったので、臨席の老同志と専門家たちの意見を聞きたいと述べる。

蕭華夫人王新蘭が内心の感動を抑えきれず、「1964年病身の蕭華同志が『長征組歌』を創作した。1965年7月に上演し、毛主席、周総理など中央指導者の配慮と支持を得た」と言う。

続いて大庁で新版『長征組歌』の楽曲が放送された。雄渾で力強い旋律、勢いのある合唱、気高く豪壮な曲調が、臨席の人々を、60年前の艱難辛苦の史詩のような回憶に引き込んだ。何人かの老同志は音楽のリズムに合わせて、自然にソファの上で手拍子を打った。前列に坐る張愛萍は天上を眺めて沈思し、遲浩田は右手で顔を覆い感慨にふけていた。〔中略〕『組歌』を聞き終えて、遲浩田は本紙記者の取材に答えて言う。「新版のレコードは特色がある。革命の伝統を発揚し、主旋律を発揚するのに有意義である」と。張震が言う。「音楽を聞き終えて、われわれは毛主席の偉大さを思い出し、老戰友や老上官の刻苦奮闘の精神を思い出した」と。側に坐る林月琴はがまんできずに言う。「現在の若い人を教育するのなら、老一代の革命精神を永遠に発揚しなければならない」と<sup>(64)</sup>。

「総政版」の特徴は、合唱のほかに、寸劇化した「表演唱」、群舞を組み合わせた大規模な演出である。上の記事にあるように「'95新版『長征組歌』音楽会」の様子を伺えば、そこには、成都華星光盤会社のレーザーディスクとカセットテープがあり、次世代の將軍たちがソファの上で手拍子を打つ姿がある。1992年の鄧小平の南巡講話は、いわゆる「保守派」との闘争

を経て、「改革派」主導の下、共産党と解放軍が経済建設の最大の受益者となりつつある時代の「紅色経典」としてイベント化され、ショーアップされた「光栄ある伝統」であり、ここに見るのはまぎれもなく「改革開放時代」の『長征組歌』である。

3年後の1999年のことではあるが戦友文工団の新版『長征組歌』の公演の記録がある。その上演は北京蒼明文化有限責任会社が計画し、解放軍報文化部、『光明日報』文芸部、工人日報文芸部、中央人民廣播電台文芸部中心と『人民日報』文芸部等のメディアが連合して主宰したもので、戦友文工団が合唱、舞踏、楽隊等各部門180人の強大な陣容を集めた大規模なものであった<sup>(65)</sup>。

「民営公司」のイベント企画会社が「光栄ある伝統」を娯楽化している。われわれはここに「社会主義」の「商品経済化」を見るのであるが、それがもつ政治的歴史的意義については稿を改めて議論してみたい。

## 【注】

- (1) 『長征組歌』の成立については、さしあたり、拙稿「合唱組曲『長征組歌』における歴史の美学化」『目白大学人文科学研究』第11号、2015年3月を参照。
- (2) 李鏡「《長征組歌》：上将詩人的病中之作」『党史博覧』2001年1期、21頁。
- (3) 「工農紅軍長征勝利的頌歌 《紅軍不怕遠征難》組歌在京公演」『人民日報』1965年8月2日。
- (4) 李鏡「《長征組歌》：上将詩人的病中之作」前掲、21頁。
- (5) 顔梅生「開国上将蕭華和他的《長征組歌》」『時代人物』2007年Z1期、14頁。
- (6) 李鏡『儒將蕭華』解放軍文芸出版社、1998年8月、600～601頁。江青は林彪を利用し軍内へ干渉してきた。上海で部隊文芸工作座談会を開催したとき、蕭華はたいへん憤り、「江青は京劇改革をやるのではないのか。どうして軍隊のことに関わるのか。こんなに多くに関わるというのか」という。総政主任の出席拒否は江青をひどく怒らせたという（顔梅生「開国上将蕭華和他的《長征組歌》」同上、15頁）。
- (7) 李鏡『儒將蕭華』同上、605頁。
- (8) 李徳・舒雲編著『林彪日記』下冊、明鏡出版、2009年、998頁。尚、改組された全軍文化革命小組の構成は、組長徐向前、顧問江青、副組長蕭華、楊成武、王新亭、徐立清、閔鋒、謝鏜忠、李曼村。組員王宏坤、余立金、劉華清、唐平鏞、胡癡、葉群等である。
- (9) 李鏡『儒將蕭華』前掲、1998年8月、606頁。毛礼文、陳家鸚「蕭華与《長征組歌》」『党史博采』2001年9期。舒雲『林彪画伝』明鏡出版、2007年、620頁。
- (10) 李徳・舒雲編著『林彪日記』下冊、前掲、1047～1048頁。特に林彪の蕭華保護の発言については、「為保蕭華、林彪怒斥江青」（舒雲『林彪画伝』前掲、619頁）を参照。
- (11) 顔梅生「開国上将蕭華和他的《長征組歌》」前掲、16頁。
- (12) 舒雲『林彪画伝』前掲、640～641頁。
- (13) 舒雲『林彪画伝』同上、640～641頁。李徳・舒雲編著『林彪日記』下冊、前掲、1040頁。
- (14) 中共中央文献研究室編『周恩来年譜（1949－1976）』下巻、中央文献出版社、1997年、148頁。
- (15) 「熱烈慶祝“五一”國際勞動節 首都文芸舞台將隆重公演革命文芸節目」『人民日報』1967年4月30日。
- (16) 中共中央文献研究室編『周恩来年譜（1949－1976）』下巻、前掲、153頁。
- (17) 李徳・舒雲編著『林彪日記』下冊、前掲、1047～1048頁。

- (18) 中共中央文献研究室編『周恩來年譜（1949－1976）』下卷、前掲、153頁。
- (19) 丁凱文、司馬清揚『找尋真實的林彪』中國文革歷史出版社、2011年、325頁。
- (20) 舒雲『林彪畫伝』前掲、641頁。
- (21) 恩相『晚年林彪』東西文化事業有限公司、2007年、276頁。
- (22) 李鏡『儒將蕭華』前掲、621～625頁。
- (23) 「蕭華同志生平」『人民日報』1985年8月24日。
- (24) 毛札文、陳家鸚「蕭華与《長征組歌》」前掲。
- (25) 梅宏「蕭華將軍与《長征組歌》」『廣東党史』2004年4期、29頁。劉志堅「痛悼老戰友蕭華同志」『人民日報』1985年9月29日。
- (26) 恩相『晚年林彪』東西文化事業有限公司、2007年、280～281頁。
- (27) 丁凱文、司馬清揚『找尋真實的林彪』前掲、314頁。
- (28) 「團結起來，爭取更大的勝利」『人民日報』1972年1月1日。
- (29) 顏梅生「開國上將蕭華和他的《長征組歌》」前掲、16頁。李鏡『儒將蕭華』前掲、635～638頁。
- (30) 夏杏珍『共和國重大文化事件紀程』九州出版社、2013年、62～63頁。
- (31) 夏杏珍『共和國重大文化事件紀程』同上、71～79頁。
- (32) 毛札文、陳家鸚「蕭華与《長征組歌》」前掲。
- (33) 馬子躍編著『怎樣排演長征組歌』大眾文芸出版社、2006年9月、9頁。
- (34) 顏梅生「開國上將蕭華和他的《長征組歌》」前掲、16頁。但し「紅軍急切上征途」は妥当ではないので、現在は原詞にもとされている（馬子躍編著『怎樣排演長征組歌』同上、3頁）。
- (35) 李鏡『《長征組歌》：上將詩人的病中之作』前掲、21頁。
- (36) 馬子躍編著『怎樣排演長征組歌』前掲、10頁。
- (37) 孟蘭英「遇秋与《長征組歌》」『東北之窗』2006年05期、59頁。
- (38) 「解放軍文芸單位在京演出歌頌紅軍長征節目 話劇『萬水千山』、長征組歌『紅軍不怕遠征難』等節目反映了長征的英雄業績、宣傳長征的偉大意義、歌頌了毛主席的革命路線」『人民日報』1975年10月20日。
- (39) 「歌頌長征的文芸節目受到工農兵贊揚 這些節目熱情歌頌了毛主席的革命路線、是進行思想政治路線教育和革命傳統教育的好材料、使紅軍老戰士受到鼓舞、年青一代得到教育」『人民日報』1975年11月7日。
- (40) 「毛主席的革命文芸路線勝利萬歲 為工農兵演出」『人民日報』1975年11月21日。
- (41) 中共中央文献研究室編『周恩來年譜（1949－1976）』下卷、前掲、722頁。
- (42) 李鏡『《長征組歌》：上將詩人的病中之作』前掲、21頁。
- (43) 王建柱「李遇秋：把大半輩子心血融入《長征組歌》」『湘潮』2007年第6期、53頁。
- (44) 唐江口述「1965～1975：《長征組歌》的十年」『縱橫』2007年5期、37頁。
- (45) 馬子躍編著『怎樣排演長征組歌』前掲、9頁。
- (46) 唐江口述「1965～1975：《長征組歌》的十年」前掲、37頁。「四人組」による映画化妨害については、中國人民解放軍八一電影制片廠「紅軍不怕遠征難—“四人幫”破壞影片《長征組歌》罪責難逃」『人民日報』1977年2月10日を参照。
- (47) 顏梅生「開國上將蕭華和他的《長征組歌》」前掲、16頁。
- (48) 陳沂「王華藝術青春長在」『人民日報』1991年3月17日。
- (49) 「在毛主席的無產階級革命文芸路線指引下 又有二十三部新影片与觀眾見面」『人民日報』1976年5月23日。
- (50) 「毛主席周總理關懷的《長征組歌》深受歡迎 在首都連續演出、盛況空前、廣大工農兵和文芸戰士決心唱組歌、憶傳統、學紅軍、批“四害”、緊跟華主席繼續長征」『人民日報』1977年1月17日（新華社1977年1月16日通信）。夏杏珍『共和國重大文化事件紀程』前掲、96～97頁。
- (51) 鄭翼「“四人幫”為何仇視《萬水千山》」『人民日報』1977年2月10日。
- (52) 同上。

- (53) 同上。
- (54) 「歌頌長征的文芸節目受到工農兵贊揚 這些節目熱情歌頌了毛主席的革命路線、是進行思想政治路線教育和革命傳統教育的好材料、使紅軍老戰士受到鼓舞、年青一代得到教育」『人民日報』1975年11月7日。
- (55) 同上。
- (56) 孟蘭英「遇秋与《長征組歌》」前掲、59頁。
- (57) 「獻給領袖的頌歌 射向“四人幫”的炮彈—記首都文芸工作者的兩場演出」『人民日報』1976年12月15日。
- (58) 唐江口述「1965～1975：《長征組歌》的十年」前掲、36頁。
- (59) 孫煥英「《長征組歌》的別一版本」『人民日報』1993年1月30日（『人民音樂』1993年8期に転載。文章の一部に相違がある）。
- (60) 袁成亮「肖華將軍与《長征組歌》」『音樂生活』2007年11期、45頁。顏梅生「開国上将蕭華和他的《長征組歌》」前掲、14頁。
- (61) 孫煥英「《長征組歌》的別一版本」前掲。
- (62) 袁成亮「肖華將軍与《長征組歌》」前掲、45頁。
- (63) 孟蘭英「遇秋与《長征組歌》」前掲、59頁。顏梅生「開国上将蕭華和他的《長征組歌》」前掲、17頁。
- (64) 劉工踐、王必勝「氣勢磅礴[石薄]的回響—'95新版『長征組歌』音樂會側記」『人民日報』1995年10月11日。
- (65) 劉宇「北京軍区战友歌舞团向国慶献礼《長征組歌》重登舞台」『人民日報』1999年9月10日。劉玉「《長征組歌》演出上千場」『人民日報』1999年9月24日。

(平成27年11月4日受理)

## 『紅軍不怕遠征難——長征組歌』歌詞對照表

原詩『長征組詩』 (1964年11月)	『長征組歌』戰友版 (1965年10月)	『長征組歌』總政版 (1966年7月)	『長征組歌』75年版 (1975年12月)
<p>1. 告別</p> <p>紅旗飄、軍号響。 子弟兵、別故鄉。</p> <p>紅軍主力上征途、 戰略轉移去遠方。</p> <p>男女老少來相送、 熱淚沾衣敘情長。</p> <p>烏雲遮天難持久、 紅日永遠放光芒。 革命一定要勝利、 敵人終將被埋葬。</p>	<p>1. 告別</p> <p>紅旗飄、軍号響。 子弟兵、別故鄉。</p> <p>紅軍主力上征途、 戰略轉移去遠方。</p> <p>男女老少來相送、 熱淚沾衣敘情長。 <b>緊緊握住紅軍的手、 親人何時返故鄉？</b></p> <p>烏雲遮天難持久、 紅日永遠放光芒。 革命一定要勝利、 敵人終將被埋葬。</p>	<p>1. 告別</p> <p>紅旗飄、軍号響。 子弟兵、別故鄉。</p> <p>紅軍主力上征途、 戰略轉移去遠方。</p> <p>男女老少來相送、 熱淚沾衣敘情長。 <b>緊緊握住紅軍的手、 捷報早日傳故鄉？</b></p> <p>烏雲遮天難持久、 紅日永遠放光芒。 革命一定要勝利、 敵人終將被埋葬。</p>	<p>1. 告別</p> <p>紅旗飄、軍号響。 子弟兵、別故鄉。 <b>王明路線滔天罪、 五次“圍剿”敵猖狂。</b></p> <p>紅軍急切上征途、 戰略轉移去遠方。</p> <p>男女老少來相送、 熱淚沾衣敘情長。 <b>緊緊握住紅軍的手、 親人何時返故鄉？</b></p> <p>烏雲遮天難持久、 紅日永遠放光芒。 革命一定要勝利、 敵人終將被埋葬。</p>
<p>2. 突破封鎖線</p> <p>路迢迢、秋風涼。 敵重重、軍情忙。 紅軍夜渡于都河、 固陂新田打勝仗。</p> <p>佯攻汝城占宜章、 跨過瀟水搶湘江。 三十晝夜飛行軍、 突破四道封鎖牆。 圍追堵截奈我何、 數十萬敵空惆悵！</p>	<p>2. 突破封鎖線</p> <p>路迢迢、秋風涼。 敵重重、軍情忙。 紅軍夜渡于都河、 固陂新田打勝仗。</p> <p>佯攻汝城占宜章、 跨過瀟水搶湘江。 三十晝夜飛行軍、 突破四道封鎖牆。 圍追堵截奈我何、 數十萬敵軍空惆悵！</p>	<p>2. 突破封鎖線</p> <p>路迢迢、秋風涼。 敵重重、軍情忙。 紅軍夜渡于都河、 固陂新田打勝仗。</p> <p>佯攻汝城占宜章、 跨過瀟水搶湘江。 三十晝夜飛行軍、 突破四道封鎖牆。 圍追堵截奈我何、 數十萬敵軍空惆悵！</p>	<p>2. 突破封鎖線</p> <p>路迢迢、秋風涼。 敵重重、軍情忙。 紅軍夜渡于都河、 <b>跨過五嶺搶湘江。</b></p> <p>三十晝夜飛行軍、 突破四道封鎖牆。 <b>不怕流血不怕苦、 前仆後繼殺虎狼。 全軍想念毛主席、 迷霧途中盼太陽。</b></p>
<p>3. 進遵義</p> <p>苗嶺秀、溪水清。 百鳥啼、報新春。 烏江天險擋不住、 婁山刀損殲敵兵。</p> <p>遵義會議放光輝、 全黨全軍齊歡慶。 萬眾歡呼毛主席、 工農踴躍當紅軍。 英明領袖來掌舵、 革命磅礴向前進。</p>	<p>3. 進遵義</p> <p>苗嶺秀、旭日昇、 百鳥啼、報新春。 烏江天險擋不住、 婁山刀損殲敵兵。</p> <p>遵義會議放光輝、 全黨全軍齊歡慶。 萬眾歡呼毛主席、 工農踴躍當紅軍。 英明領袖來掌舵、 革命磅礴向前進。 <b>毛主席嚮來掌舵、 革命磅礴向前進。</b></p>	<p>3. 進遵義</p> <p>苗嶺秀、溪水清。 百鳥啼、報新春。 烏江天險擋不住、 婁山刀損殲敵兵。</p> <p>遵義會議放光輝、 全黨全軍齊歡慶。 萬眾歡呼毛主席、 工農踴躍當紅軍。 英明領袖來掌舵、 革命磅礴向前進。</p>	<p>3. 遵義會議放光輝</p> <p>苗嶺秀、旭日昇。 百鳥啼、報新春。 <b>遵義會議放光輝、 全黨全軍齊歡慶。</b></p> <p>萬眾歡呼毛主席、 <b>馬列路線指航程。 雄師刀損告大捷。</b> 工農踴躍當紅軍。 英明領袖來掌舵、 革命磅礴向前進。</p>



<p>4. 入雲南</p> <p>橫断山、路難行。 敵重兵、壓黔境。 戰士双脚走天下、 聲東擊西出奇兵。</p> <p>烏江天險重飛渡、 兵臨貴陽逼昆明。 敵人棄甲丟煙槍、 我軍乘勝趕路程。 調虎離山襲金沙、 主席用兵真如神。</p>	<p>4. 入雲南</p> <p><b>橫断山、路難行。 天如火來、水似銀。 親人哪送水來解渴、 軍民魚水一家人！</b></p> <p>橫断山、路難行。 敵重兵、壓黔境。 戰士双脚走天下、 四渡赤水出奇兵。</p> <p>烏江天險重飛渡、 兵臨貴陽逼昆明。 敵人棄甲丟煙槍、 我軍乘勝趕路程。 調虎離山襲金沙、 <b>毛主席用兵真如神。</b></p>	<p>4. 入雲南</p> <p><b>橫断山、路難行。 天如火來、水似銀。 親人哪送水來解渴、 軍民魚水一家人！</b></p> <p>橫断山、路難行。 敵重兵、壓黔境。 戰士双脚走天下、 <b>聲東擊西出奇兵。</b></p> <p>烏江天險重飛渡、 兵臨貴陽逼昆明。 敵人棄甲丟煙槍、 我軍乘勝趕路程。 調虎離山襲金沙、 主席用兵真如神</p>	<p>4. 入雲南</p> <p><b>橫断山、路難行。 天如火、水似銀。 親人送水來解渴、 軍民魚水一家人！</b></p> <p>橫断山、路難行。 敵重兵、壓黔境。 戰士双脚走天下、 四渡赤水出奇兵。</p> <p>烏江天險重飛渡、 兵臨貴陽逼昆明。 敵人棄甲丟煙槍、 我軍乘勝趕路程。 調虎離山襲金沙、 <b>毛主席用兵真如神。</b></p>
<p>5. 飛越大渡河</p> <p>水湍急、山峭聳。 雄關險、豺狼凶。 健兒巧渡金沙江、 兄弟民族夾道迎。</p> <p>安順場辺孤舟勇、 踩波踏浪殲敵人。 昼夜兼程二百四、 猛打窮追奪瀘定。 鐵索橋上威風顯、 勇士萬代留英名。</p>	<p>5. 飛越大渡河</p> <p>水湍急、山峭聳、 雄關險、豺狼凶。 健兒巧渡金沙江、 兄弟民族夾道迎。</p> <p>安順場畔孤舟勇、 踩波踏浪殲敵人。 昼夜兼程二百四、 猛打窮追奪瀘定。 鐵索橋上<b>顯威風</b>、 勇士萬代留英名。</p>	<p>5. 飛越大渡河</p> <p>水湍急、山峭聳。 雄關險、豺狼凶。 健兒巧渡金沙江、 兄弟民族夾道迎。</p> <p>安順場辺孤舟勇、 踩波踏浪殲敵人。 昼夜兼程二百四、 猛打<b>猛</b>追奪瀘定。 鐵索橋上威風顯、 勇士萬代留英名。</p>	<p>5. 飛越大渡河</p> <p>水湍急、山峭聳。 雄關險、豺狼凶。 健兒巧渡金沙江、 兄弟民族夾道迎。</p> <p>安順場畔孤舟勇、 踩波踏浪殲敵人。 昼夜兼程二百四、 猛打窮追奪瀘定。 鐵索橋上<b>顯威風</b>、 勇士萬代留英名。</p>
<p>6. 過雪山草地</p> <p>雪皚皚、野茫茫。 高原寒、炊斷糧。 紅軍都是鋼鐵漢、 千錘百煉不怕難。</p> <p>雪山低頭迎遠客、 草毯泥氈紮營盤。 風雨侵衣骨更硬、 野菜充飢志愈堅。 官兵一致同甘苦、 革命理想高於天。</p>	<p>6. 過雪山草地</p> <p>雪皚皚、野茫茫。 高原寒、炊斷糧。 紅軍都是鋼鐵漢、 千錘百煉不怕難。</p> <p>雪山低頭迎遠客、 草毯泥氈紮營盤。 風雨侵衣骨更硬、 野菜充飢志愈堅。 官兵一致同甘苦、 革命理想高於天。</p>	<p>6. 過雪山草地</p> <p>雪皚皚、野茫茫。 高原寒、炊斷糧。 紅軍都是鋼鐵漢、 千錘百煉不怕難。</p> <p>雪山低頭迎遠客、 草毯泥氈紮營盤。 風雨侵衣骨更硬、 野菜充飢志愈堅。 官兵一致同甘苦、 革命理想高於天。</p>	<p>6. 過雪山草地</p> <p>雪皚皚、野茫茫。 高原寒、炊斷糧。 紅軍都是鋼鐵漢、 千錘百煉不怕難。</p> <p>雪山低頭迎遠客、 草毯泥氈紮營盤。 風雨侵衣骨更硬、 野菜充飢志愈堅。 官兵一致同甘苦、 革命理想高於天。</p>
<p>7. 到吳起鎮</p> <p>鑼鼓響、秧歌起。 黃河唱、長城喜。 臘子口上降神兵、 百丈懸崖當雲梯。</p> <p>六盤山上紅旗展、 勢如破竹掃敵騎。 陝甘軍民傳喜訊、 征師勝利到吳起。 南北兄弟手攜手、 擴大前進根柢地。</p>	<p>7. 到吳起鎮</p> <p>鑼鼓響、秧歌起。 黃河唱、長城喜。 臘子口上降神兵、 百丈懸崖當雲梯。</p> <p>六盤山上紅旗展、 勢如破竹掃敵騎。 陝甘軍民傳喜訊、 征師勝利到吳起。 南北兄弟手攜手、 擴大前進根柢地。</p>	<p>7. 到吳起鎮</p> <p>鑼鼓響、秧歌起。 黃河唱、長城喜。 臘子口上降神兵、 百丈懸崖當雲梯。</p> <p>六盤山上紅旗展、 勢如破竹掃敵騎。 陝甘軍民傳喜訊、 征師勝利到吳起。 南北兄弟手攜手、 擴大前進根柢地。</p>	<p>7. 到吳起鎮</p> <p>鑼鼓響、秧歌起。 黃河唱、長城喜。 臘子口上降神兵、 百丈懸崖當雲梯。</p> <p>六盤山上紅旗展、 勢如破竹掃敵騎。 陝甘軍民傳喜訊、 征師勝利到吳起。 南北兄弟手攜手、 擴大前進根柢地。</p>

<p>8. 祝捷</p> <p>大雪飛、洗征塵。 敵進犯、送禮品。 長途跋涉足未穩、 敵軍圍攻形勢緊。</p> <p>主席戰場來指揮、 全軍振奮殺敵人。 直羅滿山炮聲急、 萬余敵兵一網盡。 活捉了敵酋牛師長、 軍民凱歌高入雲。</p>	<p>8. 祝捷</p> <p>大雪<b>紛</b>飛、<b>為我</b>洗征塵、 敵人進攻、送<b>來好</b>禮品。 長途跋涉足未穩、 敵軍圍攻形勢緊。</p> <p>毛主席戰場來指揮、 全軍振奮殺敵人。 直羅滿山炮聲急、 萬余敵兵一網<b>擒</b>。 活捉了敵酋牛師長、 軍民凱歌高入雲哪。</p>	<p>8. 祝捷</p> <p>大雪飛、洗征塵。 敵進犯、送禮品。 長途跋涉足未穩、 敵軍圍攻形勢緊。</p> <p>毛主席戰場來指揮、 全軍振奮殺敵人。 直羅滿山炮聲急、 萬余敵兵一網盡。 活捉敵酋牛師長、 軍民凱歌高入雲。</p>	<p>8. 祝捷</p> <p>大雪飛、洗征塵。 敵進犯、送禮品。 長途跋涉足未穩、 敵<b>軍</b>圍攻形勢緊。</p> <p>毛主席戰場來指揮、 全軍振奮殺敵人。 直羅滿山炮聲急、 萬余敵兵一網盡。 活捉敵酋牛師長、 軍民凱歌高入雲。 <b>勝利完成奠基石、 軍民凱歌高入雲。</b></p>
<p>9. 報喜</p> <p>手足情、同志心。 飛捷報、伝佳音。 英勇的二四方面軍、 轉戰數省久聞名。</p> <p>歷盡千辛萬般苦、 勝利會聚甘孜城。 踏破岷山千里雪、 高歌北進并肩行。 辺区軍民喜若狂、 紅旗招展迎親人。</p>	<p>9. 報喜</p> <p>手足情、同志心。 飛捷報、伝佳音。 英勇的二四方面軍、 轉戰數省久聞名。</p> <p>歷盡千辛萬般苦、 勝利會聚甘孜城。 踏破岷山千里雪、 高歌北進并肩行。 辺区軍民喜若狂、 紅旗招展迎親人。</p>	<p>9. 報喜</p> <p>手足情、同志心。 飛捷報、伝佳音。 英勇的二四方面軍、 轉戰數省久聞名。</p> <p>歷盡千辛萬般苦、 勝利會聚甘孜城。 踏破岷山千里雪、 高歌北進并肩行。 辺区軍民喜若狂、 紅旗招展迎親人。</p>	<p>9. 報喜</p> <p>手足情、同志心。 飛捷報、伝佳音。 英勇的二四方面軍、 轉戰數省久聞名。</p> <p>歷盡千辛萬般苦、 勝利會聚甘孜城。 <b>全軍痛斥張國濤、 歡呼北上</b>并肩行。 辺区軍民喜若狂、 紅旗招展迎親人。</p>
<p>10. 大會師</p> <p>紅旗飄、軍号響。 戰馬吼、歌声亮。 鉄流兩万五千里、 紅軍威名天下揚。</p> <p>三支勁旅大會師、 日寇胆破蔣魂喪。 軍也樂來民也樂、 万水千山齊歌唱。 歌唱領袖毛主席、 歌唱偉大共產黨。</p>	<p>10. 大會師</p> <p>紅旗飄、軍号響。 戰馬吼、歌声亮。 鉄流兩万五千里、 紅軍威名天下揚。</p> <p>三支勁旅大會師、 日寇胆破蔣魂喪。 軍也樂來民也樂、 万水千山齊歌唱。 歌唱領袖毛主席、 歌唱偉大<b>的</b>共產黨。</p>	<p>10. <b>會寧</b>大會師</p> <p>紅旗飄、軍号響。 戰馬吼、歌声亮。 鉄流兩万五千里、 紅軍威名天下揚。</p> <p>三支勁旅大會師、 日寇胆破蔣魂喪。 軍也樂來民也樂、 万水千山齊歌唱。 歌唱領袖毛主席、 歌唱偉大共產黨。</p>	<p>10. 大會師</p> <p>紅旗飄、軍号響。 戰馬吼、歌声亮。 鉄流兩万五千里、 紅軍威名天下揚。</p> <p><b>各路</b>勁旅大會師、 日寇胆破蔣魂喪。 軍也樂來民也樂、 万水千山齊歌唱。 歌唱領袖毛主席、 歌唱偉大<b>的</b>共產黨。</p>
<p>11. 會師獻禮</p> <p>頂天地、志凌雲。 山城堡、軍威振。 夜色朦朧群山隱、 三軍奮勇殺敵人。</p> <p>火光万道迎空舞、 霹靂一声動地鳴。 兄弟并肩顯身手、 痛殲蔣賊王牌軍。 旭日東昇照戰場、 會師獻禮載功勳。</p>			

<p>12. 誓師抗日</p> <p>日寇侵、災難深。 国民党、当逃兵。 紅軍集結陝甘寧、 抗日風暴卷煙雲。</p> <p>呼呼停戰驅日寇、 我党宣言普天応。 軍民怒火千万丈、 揮戈誓師大進軍。 排山倒海風雷起、 解放祖国遍地春。</p>			
<p>蕭華「紅軍不怕遠征難——為紅軍長征三十年而作」『長征大事典』貴州人民、1996年9月、2278～2281頁。 蕭華詞、晨耕等作『紅軍不怕遠征難：長征組歌、總譜』人民音樂出版社、2009年9月、「附録一、蕭華『長征組歌紅軍不怕遠征難 原創歌詞』」186～189頁。</p>	<p>蕭華詞、晨耕、生茂、唐柯、遇秋曲『紅軍不怕遠征難——為紅軍長征三十周年而作（長征組歌）』音樂出版社、1965年10月。</p>	<p>蕭華詞、時樂濛、彥克、孟貴彬、陸祖龍曲『紅軍不怕遠征難（表演大合唱）』解放軍歌曲編輯部偏印、1966年7月。</p>	<p>蕭華詞、晨耕、生茂、唐柯、遇秋曲『紅軍不怕遠征難——長征組歌』人民音樂出版社、1975年12月。 王萃、黃寶善導演『紅軍不怕遠征難——長征組歌』八一電影制片廠、1976年2月。</p>